

The Cloud of Unknowing における 同意語以外の組み合わせによるワードペア

青木 繁博

Non-synonymous Word Pairs in *The Cloud of Unknowing*

Shigehiro Aoki

0. はじめに

ここで言う「ワードペア」とは、and をはじめとする接続詞によって関連する2語が結び付けられたもので、古英語・中英語から現代英語に至るまで広く用いられている表現である。ワードペアの典型的な例としては、Shibata, Yamaguchi, Koskenniemi (1975) らの先行研究において複数回言及された、以下のようなものが挙げられる。

cher & cuntenawns, heuy & sory, hyndryn & lette, joy & gladnes, joy & blysse, kyd ne knowyn, mede & reward, solas and comfort, sygnys & tokenys, witte & wisdom, wroth & in gret angry

さらに現代英語に見られるワードペアとしては、以下のようなペアが多くの場面で用いられている。

body and soul, bread and wine, night and day, quick and dead, safe and sound, to and fro

これまで、特に中英語のワードペアの研究においては、主として同意語が結び付けられたペアに重きを置いて研究が進められてきた。このことは、先行研究の中にはワードペアを指すものとして“synonymic pairs” (Shibata の用語)、“synonymous pair-words” (Yamaguchi の用語) などが用いられている点にも示されている。同意語のペアを中心とした先行研究は多くの成果を生み出してきたと言える。しかしながら、以下に示す複数の観点から、同意語以外の意味関係を持つ2語が組み合わせられたペアについても、同意語のペアと同様の十分な考察が必要であると考えられる。

1点目は頻度の点である。谷によると、the Wooing Group における145例のワードペアについて、同意語（あるいは類義語）のペア85例に対し、同意語以外の組み合わせによるペアは60例となっている。またKoskenniemi (1975) によると、*The Book of Margery Kempe* における262例のワードペアについて、同意語（あるいは類義語）のペア159例に対し、同意語以外の組み合わせによるペアは103例となっている。このように、同意語以外の組み合わせによるペアも、十分な数だけ中英語の作品内に見られること

が明らかになっている。

2点目としては、現代英語との関係を挙げるができる。上にも挙げた、現代英語に見られるワードペア表現のほとんどは、同意語以外の組み合わせによるペアである。同意語のペアを探すことは、現代英語では根本的に難しいのではないだろうか。少なくとも現代英語に限って言えば、典型的なペアとは同意語以外の組み合わせによるペアということになる。

このような論を進めた場合、同意語のペアは古英語・中英語に固有のものである、ということになるのかもしれない。このことはもちろん古英語・中英語の特徴といった観点からは非常に重要である反面、現代英語への「流れ」を見る際には、同意語以外の組み合わせによるペアを精査することによってのみ、得られる知見があるのではないかと考えられる。

これまでの同意語以外の組み合わせによるペアに関する諸考察において問題であったと考えられるのは、1) 同意語のペアとの位置付けが曖昧である点、2) 同意語以外の組み合わせによるペア自体の分類が妥当かどうかという点、この2つである。特に2点目が本研究における問題提起となる部分である。同意語以外のペアと一口に言っても、その中には多様な種類のペアが見られる。

ワードペアの分類については Koskenniemi (1968) が1つの出発点となる。以下は、Koskenniemi (1968) のp.90にある分類であり、日本語での説明は谷のp.23に基づくものである。

Koskenniemi (1968) における4つの分類：

1. nearly-synonymous 「同義あるいは類義」
2. associated by contiguity of meaning 「換喩、つまり意味の隣接による結びつき」
3. complementary or antonymous 「相補的または反意」
4. enumerative 「列挙」

Koskenniemi (1968) の分類には、問題点が3つあると考える。1) “contiguity of meaning” という、やや不明瞭にも取れる基準が含まれていること。2) “complementary or antonymous” については、反意性そのものに幅があることへの対応。3) “enumerative” については、列挙された語句同士には共通点はないのか、また、それはある種の意味関係ではないのか。これらの点の扱いによっては、分類自体が不明確なものになる恐れもある。本研究のように実際の用例を分類する際には、Koskenniemi (1968) の分類を尊重しつつも、ワードペアの持つ多様な意味関係に明確に対応する分類になるよう、適宜修正を加えていくことも必要である。

以上の観点から、本研究では、特定のテキストに実際に見られる「同意語以外の組み合わせによるワードペア」を収集し、2語の間にある意味関係に基づいて分類する。本研究におけるワードペアの分類では、上述のKoskenniemi (1968) の分類に見られた3つの問題点に留意する。こうした分類を通じて、それぞれのパターンペアの根底にある動機や機能を分析し、同意語以外の組み合わせによるペアの多様性や、表現技法としての有効性を論じる。このように、同意語以外の組み合わせによるペアを総合的に考察することで、これまでの研究にはなかった新たな視点からワードペアを説明することを目指す。

なお本研究での取り組みは、将来的に着手する予定の「古英語から現代英語に至るまでのワードペアの通時的研究」や「同意語のペア・同意語以外の組み合わせによるペア等すべてを含む包括的なワードペア研究」などを展開する際の基盤の1つになると考えている。

0. 1. 手順

- ・ *The Cloud of Unknowing* (Gallacher による電子テキスト版、以下 *Cloud*) に見られるワードペア表現の中から、同意語以外の組み合わせによるペアに着目する。
- ・ 本研究で扱うワードペアは [A and B] の形式によるもののみとする。従って、and 以外の接続詞 (or , nor 等) によるものや、単語ではなく2語以上の語句が組み合わせられた表現は除く。ただし例外として名詞同士が組み合わせられた際に冠詞が間に挟まるものについてはここに含める。本研究では2項目の例のみを扱い、3項目以上が並べられた例は取り上げない。
- ・ *Cloud* に見られるワードペア表現 (同意語のペアも含む) は、token (延べ数) が329で、type としては240種類であった。これらのペアのアルファベット順のリストは青木 (2009) にある。なおペアの要素である2語の語順が異なるものや、活用語尾が異なる動詞などは、今後語順や音韻等の観点から考察を加えることも視野に別の type としてカウントしている (本研究ではペアの2語の間にある意味関係のみが問題となるため、以降の考察においては有意な区別とは言えない)。
- ・ 自然言語における表現を分類する以上、実際には曖昧なケースもない訳ではないが、ここでは2語の間にある意味関係を最重視する立場で、いずれかの分類に収めていく。

0. 2. ワードペアの分類

上掲の手順を経た考察の結果、*Cloud* に見られるワードペアは以下のように分類される。

- a) 同意語 116
- b) 反意語 19
 - ・ 段階的反意語
 - ・ 相補的反意語
 - ・ 反対の意味の動詞
 - ・ 対比 (重要な語句の対比を含む)
- c) 同じカテゴリに属する2語 93
 - ・ 信仰に関する良い言葉
 - ・ (逆に) 悪い言葉
 - ・ 知覚を表す動詞
 - ・ 度合いを表す語句
 - ・ 「同一カテゴリ関係」の活用
- d) 順序、あるいは狭い意味での「意味の隣接」 12

もちろん本研究で対象となるのはb以下である。b、c、dの分類について、続く3つの章において各々の概要を補足説明し、下位区分がある場合にはそれについても触れ、例を挙げる。また特にbの「反意語」およびcの「同じカテゴリに属する2語」については、「意味関係に基づく分類に典型的に収まる例」と「その意味関係自体が活用された表現の例」とを別に見ることによって、各々のワードペア表現の発展例を詳しく記述し、分析を試みる。

1. 反意語

『新英語学辞典』によると、antonymy (反義) には「段階的」(large-small、long-short など)、「相補的」(present-absent、male-female など)、「関係的」(buy-sell、parent-child など) の3つの区分を認めることができるとある。もっとも *Cloud* のワードペアの分類に関しては、1つの動作や関係を両面から見る「関係的」な反意語は分類としては立たず、それよりも「反対の意味の動詞」を設けることが実態に即している。

1. 1 段階的反意語 (5例)

the fernes and the neernes, good and iver, inner and utter, the roundnes and the swarenes, the smalnes and the gretnes¹

1. 2 相補的反意語 (5例)

absent and present, brethren and sistren, men and wommen, night and day, quik and dede

1. 3 反対の意味の動詞 (4例)

beginne and ceese, bigonnen and eendid, had and lackyd, wonne and lost

1. 4 対比

1. 4. 1. 対比、全般 (2例)

反意語からなるペアの中には、反意という関係(関係性)そのものを利用するような表現が見られることがある。これらは、既存の反意語の対をペアにしているというより、特定の2語の間にある対立関係に着目してみせることで、効果を引き出すことを狙っていると考えられる。

ワードペアという表現方法自体は、形としては非常にシンプルなものであり、関連性のある2語ならば大抵は組み合わせることが可能である(それが表現として有効かどうか、あるいはその後も定着するかどうかは別にして)。以下の例については、2語を結合することを通じて、「同意性」ではなく「反意性」を浮かび上がらせ、結果として適切に意味内容を表すことに成功していると考えられる。

synne and God, synners and innocentes

1. 4. 2. 重要な語句の対比 (3例)

対比がより進んだものと考えられる例が、これらの語句の対比である。ここには、中英語の神秘主義

¹ the roundnes and the swarenes における swarenes は、Gallacher の注に“squareness”とある。

的な作品に多く見られるだけでなく、以降英語に定着し、現代でも広く見られるようなペアが含まれている。このような用例が持っていたであろう機能あるいは動機を、現代英語に直接繋がるワードペア表現の1つの源流として捉えることもできるのではないだろうか。

bodily and goostly, body and soule, the body and the spirit

2. 同じカテゴリに属する2語

2. 1. 同じカテゴリに属する2語、全般 (11例)

これらは、元々カテゴリを成していたと見なされる類いの2語からなるペアで、後に述べる「その場で」カテゴリを形成する2語とは区別されるものである（ここではまず11例を挙げる）。なおこれ以降の数節では、この分類の下に、意味のまとまりによる下位区分がいくつか立てられる点について示していく。

harde and drie, How and whi, the juelles and the relikis, kyssyng and clippyng, mete and clothes, metes and drinkes, the nede and the werk, the werkes and the condicions, the windowes and the dore, wordes and contenaunces, wordes and dedes²

2. 2. 信仰に関する良い言葉 (27例)

almercyful and almyghty, Almighty and Alle-witty, Everlastyng and Allovly, the kyndnes and the worthines, contemplacion and love, the grace and the goodnes, holines and rightfulness, likyng and consent, the love and the levyng, loved and preysid, meek and lovyng, meek and semely, meekly and goostly, meeknes and charité, needful and speedful, the profite and the needfulness, power and cure, power and vertewe, preier and penaunce, rediest and sovereynist, reson and wil, sodenly and graciously, sodenly and parfitely, softly and sweetly, sorow and contricion, sotely and parfitely, speedful and needful

2. 3. (逆に) 悪い言葉 (4例)

gredy and hasty, pride and curiousté, proude and corious, woodnes and despite³

2. 4. 知覚を表す動詞 (12例)

Cloud では特に、以下のような「知覚」に関する動詞からなるペアが多い。このことは、神秘主義的な思想を表したテキストの内容に関連していると考えられる。

² kyssyng and clippyng における clippyng は、Gallacher の注に “embracing” とある。

³ woodnes and despite における woodnes は、別の箇所のだが Gallacher の注に “madness” とある（「狂気と嫌悪」か）。

felith and seeth, felyng and knowyng, fynden and felyn, knoweth and felith, knowyng and felyng, see and fele, see and learne, seen and conceyvid, seing and thinkyng, seyng and felyng, wetyng and felyng, wote and felith⁴

2. 5. 度合いを表す語句 (13例)

ここでもテキストの内容との関連が見られ、以下は *Cloud* に顕著に多いペアの例となっている。

condicions and dedes, the cours and the maner, degré and maner, degrees and fourmes, the degrees and the partyes, forme and degree, forme and maner, height and depnes, lengthe and brede, moche and longe, state and degré, state and forme, the tyme and the maner

2. 6. 「同一カテゴリ関係」の活用

2. 6. 1. 「同一カテゴリ関係」の活用、全般 (2例)

反意関係を利用するペアがあったのと同様に、「カテゴリを成す」という関係性そのものを利用したような用例もある。これらは、先に述べた「元々」同じカテゴリに属していると思なされる2語がペアになったものとは異なる面を持っている。カテゴリ関係を利用するペアは、特定の2語をあえて併置することによって、「その場で」何らかのカテゴリを形成し（少なくとも読み手にそれを意識させ）、効果を生み出していると考えられる。こうして生み出されたペアは、テキスト内の個々の場面に即した表現として、書き手の意図を伝えていると捉えることができる。

以降に説明する下位区分にあたるペアも同様だが、ここで扱うペアには、一見して2語の意味が「近い」とは言えない例が含まれている。2語の結び付きは、1つの大きな範囲として、前後の状況や文脈を表すものと言えるだろう。例えば下に挙げた2例のうち *the tre and the cuppe* は、当該のペアが「たとえ」や一種の象徴として、キリスト教の教義を伝えるために用いられたと考えられる。*hard and wonderful* は、「(ある種の行いが) 奇跡的な程に難しい」などと解釈できると思われる。

the tre and the cuppe, hard and wonderful

ここからは、上述の「同じカテゴリに属する2語」の下位区分であった、「信仰に関する良い言葉」「(逆に) 悪い言葉」「知覚を表す動詞」「度合いを表す語句」のそれぞれに対応して、それらの意味あるいは意味関係を活用して表現されたと考えられる例を挙げる。このような対応を観察可能なこと自体、注目に値すると思われる。

⁴ *wetyng* や *wote* は “knowing” や “understanding” の意味とされるもので、このように *feel* とのペアで多く用いられている。

2. 6. 2. 「信仰に関する良い言葉」の活用 (8例)

これはさらに、「神に関する表現」と「信徒・権威等を表す表現」とに区分される。

「神に関する表現」

answere and purvey, bigginers and profifers, herde and holpen, maker and gever⁵

「信徒・権威等を表す表現」

aungel and mans, scolers and maystres, seintes and aungelles, soules and aungelles

2. 6. 3. 「(逆に) 悪い言葉」の活用 (6例)

a cheitif and a coward, fen and donghille, frelté and unknowyng, corioustee and schewyng, horrible and customable, ymaginacion and sensualité⁶

2. 6. 4. 「知覚を表す動詞」の活用 (7例)

これらもまた、2語を結び付けることによって前後の状況や文脈を効果的に表現するものと考えられる。聖マルティヌスがイエスを夢に見たという有名な話を指す lokyng and worching は、故事の内容を端的に表すものとなっている。

do and fele, knowyn and schewid, wetyngly and wilfully, lokyng and worching, red and spokyn, reden and heren, redyng and heryng

2. 6. 5. 「度合いを表す語句」の活用 (3例)

前述の度合いを表す語句からなるペアの典型例は、「形」と「様子」など、尺度の名称を単に組み合わせたものであった。しかし以下の例では、「真実 (sothfastnes)」「純粹 (pureté)」等の語句との組み合わせを通じて、尺度の名称を表す語の方が、ある種の価値判断を伴うものへと意味変化していると捉えることができる。実際には前述の例との境界は曖昧であるが、このような例に着目することで、元々同じ意味でもなく、同じカテゴリに属するとも言えない2語の組み合わせが、ワードペア表現として発展していった経緯の一端が示されるのではないだろうか。

degré and compleccion, sothfastnes and deepnes, pureté and depnes

5 answer and purvey および herde and holpen は、いずれも神による2つの行いを表している。

6 cheitifは注に“caitiff, captive”とある。fen and donghilleは「沼地と糞の山」か。coriousteeや ymaginacionは、神秘主義的思想に基づく本テキストにおいては、「知」に関する語句が悪い意味になりうることを示す例と考えられる。

3. 順序、あるいは狭い意味での「意味の隣接」 (12例)

Koskeniemi (1968) では、「意味の隣接」という分類には実に多くの意味関係が含まれていた。概要をまとめると、「原因と結果」「1つの行動の連続する段階」「ある動詞と近い意味だが特定の種類の行動を表す動詞」「一般的な語とより限定された意味の語」「具体的な要素と抽象的な概念を表す要素」「ある語と比喩的な観念を表す語」「全体とその部分」「行動とその成り行きを表す過去分詞と形容詞」などである (p.92より)。このような状況では、どの意味関係を「隣接」として認めるかによって収めるべきワードペアの数と顔ぶれは大きく異なることになる。上述の意味関係すべてを「意味の隣接」という枠組みに収めるべきかどうかは判断が難しい。また、いくつかの意味関係は、別の区分 (同意語・類義語や一部の反意語のペア等) との境界が曖昧ではないかといった問題もある。

これらの点を踏まえて、ここでは「意味の隣接」とは呼ばず、より限定した「順序」という意味関係として分類を立てることにする。上述の Koskeniemi (1968) が見たように、同じ時間や同じ段階を指しているというよりも、時間の先-後、一連の出来事の前-後、一方が他方に作用していることなどを表す2語をペアにした例は確かに見ることができる。もちろん *Cloud* においてもある程度の数を認めることができ、このことから (分類のラベルはともかく) 「順序」の分類としての存在意義はあると考えられる。中には「順序」とも取れる一方で、別の解釈が可能な例もない訳ではないが、それについては今後まとまった数の用例を収集した上で、共時的および通時的に考察を加える必要があると考える。

felynges and wepynges, getyn and holden, getyng and keping, hetes and brennynges, rise and help, sorowed and weep, sterid and holpin, stering and rising, stirid and reisid, swink and swete, vanitee and falsheed, wone and worche⁷

4. 結び

最後に、同意語以外の組み合わせによるペアを扱った本研究の着眼点から、ワードペア全体に目を向けることによって、ワードペア研究の新たな可能性が広がる点について述べたいと思う。

おおよそ中英語までは同意語のペアも同意語以外のペアも同じように多用されていたが、同意語のペアは次第に使用されなくなり、現在はいくつかの表現に慣用的に残る程度である。同意語のワードペアは、「廃れた」と言ってよいのかもしれない。

これに対して、同意語以外の組み合わせによるワードペアは、既存のペアが残っているだけでなく、今も多くの表現が生み出されている。同意語以外の組み合わせによるワードペアは、同意語のワードペアが失った「表現力」を保持し続けていると言える。このことは同意語以外の組み合わせによるワードペアの大きな特色であり、今後、現代英語における「生きた」ワードペア表現を研究する際に、重要なポイントになると考えられる。

⁷ swink and swete は Gallacher の注に “work and sweat” とある。sterid, steringは “prompting” あるいは “impulse” とされる語である。vanitee and falsheed は「虚栄と虚言」、虚言は虚栄から出るものとしてここでは解釈した。

参考・参考文献

- 青木繁博「*The Cloud of Unknowing* に見られるワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第39号 (2009) : 81-94.
- Gallacher, Patrick J., ed. *The Cloud of Unknowing*. Originally Published in *The Cloud of Unknowing*. Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1997. TEAMS Middle English Texts. <<http://www.lib.rochester.edu/camelot/teams/cloufrm.htm>>
- Katami, Akio. "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 第9号 (2009) : 177-189.
- Kikuchi, Kiyooki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42 (1995) : 1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York : Hafner, 1947.
- エルンスト・ライズィ著、鈴木孝夫訳『意味と構造』講談社学術文庫、1994.
- 松本曜「英語反義語の認知意味論的考察」『神戸言語学論叢』第5号 (2007) : 125-130.
- 大塚高信・中島文雄 (監修) 『新英語学辞典』研究社、1982、縮刷版1999.
- Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al., Tokyo: Kenkyusha, 1958. 209-220.
- 須部宗生「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』第1号 (1999) : 39-68.
- 谷明信「初期中英語 the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊 (2003) : 19-24.
- Taylor, John R. *Linguistic Categorization*. 3rd ed. Oxford University Press, 2004.
- 寺澤芳雄 (編) 『英語学要語辞典』研究社、2002.
- 渡辺秀樹「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号) : 285-287.
- Yamaguchi, Hideo. "A Study of *the Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号 (1971) : 1-44.